



星を継ぐもの / *Inherit the Stars* (1977) / ジェイムズ・P・ホーガン (池央耿訳) / 東京創元社 (文庫・5/23刊・¥340)

六〇年代半ばまでに、SFは一度^{つた}過渡状態に陥った。その状況を打開するため、いくつかの道が模索された。一つは、前衛を含めた、主流文学のようにSFを書くこと、一つは、主流エンタテインメントとして、SFを書くことである。しかし、どちらの場合も、既存の作品を超えるのは、意外に難しかった。結局、最後に残されたのが「SFのように」SFを書くことだった……。

『星を継ぐもの』はその冒頭で、科学の発展が地球の統一を促す過程を、さりげなく語っている。とても、現実が起こるとは思えない。要するに、社会や政治の動向など、現代SFの陥りやすい通弊を、本作品では無視するといっているわけだ。「地球—人類—宇宙」テーマで、政治から科学まで、全てを描き切るのには不可能だからである。かくして、五十年前の謎をめぐる物語は、ラスト・シーンへと、壮大なイメージをはらみながら、進んでいく。

本来のSFに戻ったといっても、ただ単に、五〇年代の基礎を模倣したわけではない。サイエンスを主体に、ひたすら人類を扱った、その点が本書のミソなのだ。